

死と再生の物語としての西遊記

入谷 仙介

中国の小説の中で、「死と再生」のモチーフがならびにこれと関係の深いイニシエーションのモチーフが重要な機能を持っており、小説『西遊記』の中にも見られることは、すでに何人かの研究者によって、指摘されている。また、中国の小説において、「死と再生」の構造が見られることについても同様に研究者の指摘がある⁽¹⁾。しかし、もっぱらこれらのモチーフを通して『西遊記』を考察した研究は、まだないようである。私はこれまで、『西遊記』に見られる神話的モチーフを追求してきた。その観点からみて、「死と再生」は『西遊記』の重要な、むしろ主要なモチーフであり、『西遊記』全体が壮大な、「死と再生」の物語をなしており、『西遊記』をして長編小説として成り立たせているものであるということを信ずるにいたった。本稿ではもっぱらこの問題を取り上げたい。

—

『西遊記』の最初の七回はいわゆる「大鬧天宮」である。花果山の山頂の大石から生まれた石猴が、神通力を得て、無敵の武勇を発揮し、はては天界にまで攻め込んで大暴れするが、ついに釈迦如来に取り押さえられて、五行山の石窟に押し込められ、三蔵法師による解放を待つまでの、波乱万丈の前半生を描く。小説中のもっとも興味深く、広く親しまれている部分である。さきに拙稿「比較神話学的に見た『西遊記』」⁽²⁾において、天地創造神話の影響が見られることを論じた。しかし、別の角度から見ると、野生の山猴が、三蔵法師の西天取経の聖なる大事業に参加するにふさわしい存在に成長するための、「死と再生」のイニシエーションの連続である。

この点については、すでに二三の研究者が論じている。

井本英一氏は「孫悟空は……八卦炉に七七・四十九日入れて焼かれる。……ここで注目すべきは、悟空は死んでから四十九日を過ごしたのではないということである。猪八戒は……帝によって死刑の判決を受けた。結局、死一等を減じられ下界に追放される。……両者ともいちおう死刑の判決を受けるが、実際には処刑されていないのである。が、その死刑の判決が死有の象徴となっているのだ。……死有とは現実の死の刹那ばかりではなく、象

徹的な死の刹那をも意味していた。』⁽³⁾

氏のいう死有とは、仏教でいう死の最後の一刹那を意味する。死有から母の胎内に入って出生するまでを中有という。ここで氏の言っていることは、八卦炉・五行山の孫悟空の苦患、また猪八戒の下界追放の苦患は、彼らが、西天取経の聖業に参加するための疑似的な「死と再生」のイニシエーションであったということである。

中野美代子氏も同様な見方を取る。「かずかずの悪事を働いた孫悟空が再生するためには、もう一度母胎に戻らなければならないのは明かで、石から生まれた彼の母胎が石で無ければならないこともこれまた明かであった。』⁽⁴⁾

台湾の張静二氏は「大鬧天宮」物語全体を、中国古代の冠礼（成人儀礼）の次第になぞらえながら、孫悟空の成長過程を示す、イニシエーションの連鎖とする。天地を父母として生まれた自然児が、水中に身を躍らせて、水の洗礼を受け、美猴王となり、「天真を享楽」する嬰兒期をすごす。やがて児童期に入って、世の無常を知り、「道を尋ね仙を訪れ」「一身の神通」を得て、「大鬧天宮」の騒動を起こし、五行山の幽閉を終えて、少年期に入る。この時に、三蔵により「摩頂受戒」して、僧籍に入り、緊箍児をはめられる。これは冠礼に相当する⁽⁵⁾。

私は張氏の見方に賛同するとともに、もう少し、「大鬧天宮」における「死と再生」の過程を明確にしていきたい。

イニシエーションとは人生の一段階に達した時に、秘儀として疑似的に死を演出し、そこからの再生を演じることによって、これまでの自分は死に、新しい存在に生まれ変わるという儀礼である。孫悟空は石から生まれて以来、何度もイニシエーションを繰り返し、そのつど新しい段階に到達している。

その最初は、滝に飛び込んだことである⁽⁶⁾。生命を賭して水中に躍り入ることは、疑似的な自殺である。その結果は水簾洞の発見となり、花果山のサル群れは安全な住まいを獲得、石猴は美猴王となった。群れから見ると集団のために自己の生命を犠牲にするものが王者なのである。以下、孫悟空自身とすればイニシエーションとして、群れよりすれば「犠牲になる王」としての「死と再生」が繰り返される。

美猴王となった石猴は花果山の平穩無事な生活に飽いてくるとともに、この平安が永久に続かないことに気がつく。そこで、知恵のあるサルのすすめで、不老不死を求めるために筏に乗って花果山を去る⁽⁷⁾。このことはサルの群れから見れば、美猴王が死んだ状態になったのである。石猴は各地を放浪したすえに西洋大海のかなた、西牛賀州の須菩提祖師

に師事して、孫悟空という新しい名と無限の神通力を獲得する。新しい名前は彼が人生の新しい段階に入り、これまでの自己と決別したことの証である。花果山に帰った孫悟空は混世魔王を倒し、傲来国から武器を奪い、サルの群れを軍隊として訓練し、それまでの部族的な集団から、組織的な国家に変える。石猴の海外放浪という疑似的な死は、自己とサルの群れに決定的な変革をもたらしたのである。彼が行った西牛賀洲は仏教的世界観による須弥山を取りまく四大陸の一つであるが、西方は神話的には死の世界とされる⁽⁸⁾。

次に彼は海中の龍宮に乗り込み、武器として如意金箍棒を獲得、これによってさらに強力となる⁽⁹⁾。ついで冥府から召喚され、生死簿を抹消して、自己とサル一族を不死にする⁽¹⁰⁾。孫悟空についていうと、須菩提祖師のもとでの修行で、すでに不老不死を獲得しているはずなので、この行為により、決定的なものとしたのである。海中に入ることは死ぬことであり、冥府入りはもちろん死そのものに他ならない。

龍宮入りと冥府入りとは、孫悟空の人生をさらに新しい段階に入らせる。彼は天界の人となり、以後、花果山の意味は変化して、そこへ帰るということはイニシエーションとしての死を意味することになる。天上から見ると下界は死の世界で、天上で罪を犯した者が、下界に生まれ変わらせる話は『西遊記』の中にも猪八戒、沙悟浄⁽¹¹⁾をはじめいくらでもある。なお花果山は古い西遊記説話では孫悟空に相当するサルの従者の禁獄の場所でもあった⁽¹²⁾。

最初の昇天の時は、弼馬温という卑賤な職を与えられ、そのことを知って、花果山に逃げ帰る⁽¹³⁾。そのため天兵と戦うことになるが、天界切っ手の勇将、李天王父子を破る力戦により、和平が成立、齊天大聖の位置に昇格する。ここで桃園荒らしをやって再び花果山に逃亡⁽¹⁴⁾、今度は天界の総力を結集してのおおがかりな進攻に破れて捕らえられ、八卦炉に入れられる⁽¹⁵⁾。これも井本氏がいうように、疑似の死であり、その結果、いかなる傷害にも耐えられる、硬質の金属の身体を獲得したらしい。

八卦炉から出て、いよいよ天宮内での大乱闘となり「大鬧天宮」はクライマックスを迎える。釈迦如来との掌の上を雲で飛ぶ賭に失敗した孫悟空は、五行山の石窟に押し込められる⁽¹⁶⁾。これを中野氏は、さんざん悪事をはたらいたものを、従順な権力の手足に変えるために、母の胎内に戻されたとするが、妖怪から聖なる事業に参加するための一過程としてのイニシエーションと考えるべきであろう。「大鬧天宮」で孫悟空は宇宙秩序に対する反逆者として登場する。それは古い天地創造神話にまでさかのぼりうる壮絶なかつ根元的な戦いであった。それだけのエネルギーを獲得するために、何回もの「死と再生」を繰

り返さねばならなかったのである。そうして反逆と処罰自体がまた聖業に対するイニシエーションであったのである。

同様にして、猪八戒は月の女神嫦娥に戯れたために、沙悟浄は蟠桃会で玻璃の杯を壊したために、天上から追放されて下界で妖怪となった。聖なる大業に参加する者は、それに先だって「死と再生」の試練を受けねばならなかったのである。

二

西天取経の主体たる玄奘三蔵、『西遊記』内の呼び名では唐僧はどうであろうか。

三蔵は小説の中では乳名を江流といい、それには次のような物語がまつわる。玄奘の父は陳萼、字を光蕊といい、科挙に首席で及第、丞相殷開山の娘温嬌をめとり、江州に赴任する。途中、洪江の渡し場で悪船頭劉洪のために、陳光蕊は殺されて、長江に投げ込まれ、温嬌はむりやり劉洪の妻にされるが、その時、妊娠していたので、腹中の児を助けるために堪え忍ぶ。劉洪は陳光蕊と称して、江州に赴任する。温嬌はやがて男児を出産するが、劉洪に殺されるのを恐れ、長江に流す。子供は金山寺に流れ着いて、僧侶に拾われ、江流と名付けられ、一八歳で出家して、法名を玄奘と称する。やがて玄奘は養父の僧から身の上を聞かされ、母を捜し当てて、父の仇を討つ。陳光蕊は龍王に救われ、龍宮で暮らしていたが、地上に戻り、一家団円し、陳光蕊は学士の職に任ぜられる⁽¹⁷⁾。

この物語は、旧約聖書のモーゼをはじめ⁽¹⁸⁾、世界的に類話が普及しており、中国でも、元代の『齊東野語』に類話があり⁽¹⁹⁾、演義小説『説岳全伝』にも、民族英雄岳飛の誕生にまつわる奇瑞として見える⁽²⁰⁾。先行の研究も多いことなので、物語自体には深入りしないが、父の陳光蕊も、子の玄奘もいずれも水中に投げ込まれ、父の方はまちがいなくいったん死んだのであるが、けっきょく再生している。

父の方は栄達のために、子は西天取経の聖業を成功させるための「死と再生」のイニシエーションであったと考えられる。なお石田英一郎が、靈童が水際に出現するという俗信が中国にも広がるということを指摘する⁽²¹⁾。おそらく三蔵江流説話もこれと関係するものであろう。石田のあげる説話の中に、童子が水中で死に、再生して水神となるというものが多いは注目される。

三蔵江流説話は、『西遊記』の中では、その外枠として、今一つの「死と再生」物語を持っている。彼は前世では釈迦如来の第二番目の弟子金蟬長老、もしくは金蟬子と呼ばれる僧であったが、仏法をあなどる行為があったために、唐土に流謫されたものである。そ

の際に観世音菩薩が彼の靈魂を肉身の母の元まで送ったとされていて、菩薩との間に一種の母子関係が成立している。この転生はただ一回ではなく、九回繰り返され、現在の肉体は十回目である。しかもそのつど、童貞を守って修行に励み、西天取経の旅に出るのであるが、たびごとに流沙河で沙悟浄に食われて挫折、十回目のこのたび、過去九回の自分のどくろを筏として、ようやく渡河に成功する⁽²²⁾。西天取経の聖業を成就するためには、主役たる三蔵は、このぐらいの「死と再生」を出発に先だって重ねていなければならなかったのである。九というのは易思想にも見られる中国の民族的聖数で、『西遊記』にも九九八十一難などしばしば出現する。無限を数字として表現したものに他ならない。

ここで三蔵と孫悟空との、取経の旅に出るまでの「死と再生」の過程を比較すると、孫悟空の場合には、「死と再生」の過程を経るごとに、何らかの意味でより高い段階に到達している。したがってその過程は「大鬧天宮」という波乱万丈の物語を構成する。三蔵はそうではない。同じような過程が平板に繰り返されるだけである。したがって、九回も取経の旅に出かけても物語にはならない。孫悟空は一行を保護して、途中の妖怪どもから守り抜かねばならないから、それだけの力を身につけるために「死と再生」のイニシューションを繰り返さなければならない。三蔵は一行の精神的支柱として信仰の純粹さを守り続ければよい。そこでは繰り返しによって信仰が確認されればよかった。しかし十回目の今回は取経を成功させるという新しい段階に入るので、長江に流されるという特別のイニシューションが必要となったのである。

取経の旅路での「死と再生」の過程については後ほど検討することとして、如来のおわす靈山に到着した時の一つの出来事について問題にしたい。山麓には流れの激しい大河があり、ただ一本の危険な丸木橋が架かっているだけである。孫悟空だけは何の苦もなく丸木橋をするすると渡るが、他の者は渡りかねて立ちすくんでいる。そこへ船頭が舟を操ってやってくる。この舟で渡ろうとすると、これが底の無い舟である。三蔵が躊躇していると、孫悟空がやにわに水中へ突き飛ばす。船頭が引き上げてくれる。そこへ死体が流れてくる。よく見ると三蔵の死体である⁽²³⁾。三蔵が靈山に入るためには、人間としての肉体を捨てて、靈的存在として再生せねばならぬのである。そのことによって、三蔵はこれまで不可能であった、雲に乗って天上を往来することが出来るようになる。ここで三蔵は人間から仏へ新しい段階に入る。長江に入ることで始まった旅は、靈山の川に入ることで終わる。中鉢雅量氏はこのエピソードにもとづき、三蔵の旅は取経が目的ではなく、死の世界への到達が目的であり、そこは仏教的な極楽ではなく、中国古来の死の世界である崑崙

山と考えられるとする⁽²⁴⁾。

三

取経の旅の諸エピソードはそのまますべて「死と再生」の過程の繰り返しとってよいのであるが、その中でも特に「死と再生」というにふさわしい諸事件がある。妖怪の捕虜になること、とりわけ袋、瓶、櫃などに封じ込められること、入獄することなどがそれである。妖怪の住処はおおむね洞と称せられ、実態がかならずしも洞窟とは限らないが、イメージとしては洞窟と感ぜられる。これにもいくつかのパターンがある。一行四人のメンバーの一人一人が単独で捕まる場合、そのうちの二人が組になる場合、三人が組になる場合、全員の場合、さらに全員と一行のメンバーでない部外者までが捕らえられる場合がある。

三蔵が単独で捕まる場合が取経の旅程で八回ある。

1. 第十三回 雙叉嶺で虎穴に入る。
2. 第二十回 黄風山で黄風大王の捕虜となる。
3. 第三十回 黄袍怪のために宝象国で猛虎に変身させられ、鉄の檻に入れられる。
4. 第四十八回 通天河の靈感大王の水府に捕らえられ、石匣に入れられる。
5. 第五十四回 毒敵山琵琶洞の女怪の捕虜となる。
6. 第七十二回 盤絲洞の七女怪の捕虜となる。
7. 第八十一回 陷空山無底洞の女怪の捕虜となる。
8. 第八十五回 豹怪南山大王の捕虜となる。

このうち第十三回は、長安を出発後間もなく、まだ三従者の誰にもめぐりあっていず、唐の天子、太宗皇帝のつけてくれた二人の人間の従者がいたが、いずれも妖怪に食われてしまい、三蔵だけが太白金星に救われる。一人とぼとぼと馬を歩ませる三蔵はやがて五行山改め両界山にさしかかり、そこに禁獄されていた孫悟空を解放して、旅をともにすることになる。

第四番目の通天河の難は注意を要する。この話は全編のほぼ真ん中に置かれている。通天河は唐から数えて第三番目の通過国である車遲国と四番目の西梁女国との中間にある。通過国は天竺の属領を除いて八つあるから、河の位置はやや唐に寄っているはずであるが、河の名は唐と天竺との境界を意味しているのであろう。ここでは金魚の妖怪、靈感大王の術によってにわかには厳冬の気候となり、河が結氷し、氷上を行こうとして捕らえられ、観

世音じきじきの出馬により救われる。しかも観世音は真身を凡人の前に現している。これはフレイザーがエジプトのオシリス神話で明らかにした、穀霊としての神が季節ごとに殺されて水に投げ込まれ、女神によって復活するという神話的モチーフを思わせる⁽²⁵⁾。

5、6、7はいずれも女怪である。このうち5と7とは三蔵を誘惑して九世の間修行して保持してきた「元陽」を奪うのを目的としているから、必要なのは三蔵一人である。捕虜になったわけではないが、天竺国の公主に仮装して「撞天婚」で三蔵と結婚しようとした玉兔もこれに近い。

孫悟空が単独で捕らわれ、あるいはそれに類する状況になったことは五回ある。

1. 第三十三回 銀角の使う三山のために圧伏される。
2. 第三十四回 銀角のために葫蘆に封じ込められる。
3. 第四十一回 紅孩児の火術で仮死状態となる。
4. 第六十五回 小雷音寺黄眉怪の金鏡に封じ込まれる。
5. 第七十五回 獅駝洞の陰陽瓶に封じ込められる。

孫悟空は第二機能を体現する⁽²⁶⁾、三蔵一行の中で最強の武力であることは妖怪仲間に知れ渡っているから、彼が第一の攻撃目標となり、まず彼の自由を奪って一行の抵抗力を弱めようという妖怪側の戦略によって捕らえられることが多い。したがって彼が行動の自由を喪失した時には他の者はみな捕らえられるのが普通だが、彼は一行とは別になっており、三で猪八戒に救われたのを除けば自力もしくは他の神仏の援助で解放されているから、単独で捕らわれた例とする。葫蘆、金鏡、瓶に封じ込められること、山に押さえられて身動きできなくなること、仮死状態に陥ることはすべて象徴的な死である。

孫悟空のみの特徴的な行動に怪物の腹中に入ることがある。

1. 第十七回 熊羆怪の腹中に入る。
2. 第五十九回 羅刹女の腹中に入る。
3. 第六十六回 小雷音寺黄眉怪の腹中に入る。
4. 第六十七回 駝羅莊の大蛇の腹中に入る。
5. 第七十五回 獅駝洞の老魔王（獅子の魔王）の腹中に入る。
6. 第八十二回 無底洞の女怪の腹中に入る。

怪物の腹中に入るのは、孫悟空特有の戦術であるが、単なる戦闘の術ではなく、エリアーデがその神話的秘儀的意味に注目しているように⁽²⁷⁾、「死と再生」におけるシンボリックな死の重要なあり方である。武力としてはとうてい孫悟空の敵ではありえない女怪の腹に

二度も入っているのは、母胎への回帰を意味するのかもしれない。

猪八戒が単独で捕らえられるケースが二回ある。

1. 第二十三回 四聖のために縛られて吊り下げられる。
2. 第六十三回 碧波潭の九頭馬の捕虜となる。

1 は一行の困難な旅に耐え得る道心を試すために、観世音・文殊・普賢の三菩薩が、道教の女神、黎山老母とともに四人の美女に化して誘惑、猪八戒だけが誘惑に破れて捕らえられるのである。前稿で述べたように⁽²⁸⁾、彼は第三機能、すなわち生産・豊饒の機能を代表する存在であり、その点から見れば、彼の好色性は少しも恥ではない。このエピソードはそのような存在である彼が、豊饒原理を代表する四人の女神の犠牲にされ、再生したことを意味するのではなかろうか。

沙悟浄には単独で捕虜になることはない。個性にとぼしく存在感の薄いのがこの面でも明示されている。

四

一行のうちの二人ずつの組み合わせで捕虜になったケースは、A. 三蔵・猪八戒の組み合わせと、B. 三蔵・沙悟浄の組み合わせで、それ以外の組み合わせはない。三蔵は第一機能を体現して、武力を持たず、猪八戒、沙悟浄は第三機能を体現して⁽²⁹⁾、武力は弱いから一緒に捕らえられることが多くなる。A. B. はそれぞれ一回ずつ起こっている。

- A. 第四十回 紅孩児のために枯松澗火雲洞に捕虜となる。
- B. 第二十八回 碗子山波月洞の黄袍怪の捕虜となる。

A と B とが同時に起これば三人が捕虜になり、孫悟空が除かれる。孫悟空が入り、他の誰かが自由という状態は無い。すべてで七回ある。猪八戒と沙悟浄とはがんらい双子神なので⁽³⁰⁾、捕らえられるときもいっしょであるのが本来のあり方で、一人ずつ別々というのが変則といえる。

1. 第三十三回 銀角のために蓮花洞に捕虜となる。
2. 第五十回 金峯洞の独角兕大王に捕らえられる。
3. 第六十五回 小雷音寺黄眉怪の捕虜となる。
4. 第七十三回 千花洞の百足怪の毒棗で仮死に陥る。
5. 第七十六回 獅駝洞の魔王の捕虜となる。
6. 同上 獅駝洞の魔王のためにせいろ蒸しになる。

7. 第九十一回 青龍山玄英洞の三犀牛の捕虜となる。

全員が捕虜もしくはそれに近い状態になることが五回起こっている。すべて物語の終末近くである。

1. 第六十五回 小雷音寺黄眉怪の布袋に封じ込められる。

2. 第七十七回 獅駝洞の三魔王の捕虜となる。

3. 第八十四回 滅法国の旅館の大櫃の中に入る。

4. 第九十回 竹節山盤桓洞の九頭獅子の捕虜となる。

5. 第九十七回 地霊県入獄。

3と5とはいずれも人間によって起こされた災厄であって、一行の武力で解決することは簡単なのだが、人間を殺傷してはならぬという戒律に縛られているために、逃れるわけにいかないのである。

五

三蔵取経の壮大な聖業のためには、「死と再生」の絶え間ない反復が必要であるが、「死と再生」の苦行に参加するのは三蔵一行のみではない。多くの部外者、そして妖怪でさえも実はその参加者である。

まず一行とともに妖怪に捕らわれる部外者に人間がある。九十回における玉華州の藩王とその三王子がそれである。玉華州は天竺国の属領で、藩王に統治されているという設定になっており、その領内の竹節山盤桓洞の九頭獅子と一行の争いで、藩王父子が孫悟空を除く三人とともに捕虜となる。

単独で「死と再生」の過程を経る者もちろん一人や二人ではない。

そもそも取経の旅は唐の太宗皇帝の入冥から始まる。太宗は涇河龍王に依頼されながら、その生命を救うことが出来なかったために、龍王から冥府へ訴えられ、その召喚を受けることになる。旧臣で冥府の判官であった、崔珏の働きで現世に帰還できるが、全国統一の覇業のかけで、兄弟をも含む多くの人命をあやめた罪業を覚り、それらの冥福のために水陸大会を開き、玄奘を導師とする。大会の席に観世音が出現、真の亡者の冥福のために、大乘經典を西天から将来することを玄奘に命じ、玄奘は旅立つ⁽³¹⁾。この部分にはさらに付随する挿話として、劉全というものが、帰還した太宗の命により、冥府へ旅立ち、自分も再生し、先だった妻も、他人の身体を借りてであるが、復活させるという小さい物語がついている⁽³²⁾。三蔵を旅立たせるために、帝王とさらに二人の「死と再生」が必要であっ

たのである。

両界山で孫悟空が解放されるに当たっても、やはり一つの「死と再生」があった。一夜を勇猛な獵師の劉伯欽の家で明かした三蔵は亡父のために追善の読経をし、そのおかげで冥府で苦しんでいた亡父は中華の長者の家に再生することができた⁽³³⁾。

猪八戒の妻高翠蘭も猪八戒が一行に参加するために「死と再生」の役割を担っている⁽³⁴⁾。彼女は夫のために幽閉され、同居している父の顔すら見ることを許されなかった。孫悟空の働きでようやく解放される。

一行の外部の人物で、単独で「死と再生」を行うものが三人居る。第三十七回の烏鷄国王と、第七十回の朱紫国の金聖皇后、第九十七回の寇洪である。烏鷄国王は妖道士のために井戸の中に投げ込まれて、井龍王に保護され、三年後に孫悟空に救われる。金聖皇后は麒麟山解豸洞の賽太歳にさらわれたが、張真人の保護によって貞操を全くして孫悟空に救われる。寇洪は一行を歓待しすぎて盗賊にねらわれ、蹴り殺されて冥府に下り、孫悟空が乗り込んで貰下げて蘇生させる。この件では孫悟空はギリシャ神話のヘルメス神の役割を演じているらしい⁽³⁵⁾。

妖怪の中にも第三十五回における銀角金角兄弟のように、孫悟空に葫蘆・浄瓶に封じ込められる、のちに解放される、すなわち「死と再生」の過程を具体的に実現する者もいるが、二角兄弟がそうであるように、前身が天上界の神やあるいは神仏の従者、家畜といった存在であり、最後には元の身分に帰っていくというタイプの妖怪は、それ自体が「死と再生」の過程を踏んで行動しているといえる。天上界の存在としてはいったん死に、一行との戦闘を通じて再生していくのである。前身はかならずしも明かでなく、あるいは天上界でなくとも、戦闘を機縁として神仏に服従するようになった者もこれに含めてよい。実はすでに見たように一行を構成する、龍馬を含めた五人はすべてこのタイプといえるのであるが、妖怪としては、次のようなものがある。

1. 第十八回、黒風山黒風洞の熊羆、のちに観世音の守山大神。
2. 第三十一回、碗子山破月洞の黄袍怪、実は二十八宿の一人、奎木狼。
3. 第三十五回、平頂山蓮花洞の金角銀角兄弟、実は太上老君の金炉童子・銀炉童子。
4. 第三十九回、烏鷄国の妖道士、実は文殊菩薩の青毛獅子。
5. 第四十二回、号山火雲洞の紅孩児、のちに観世音の善財童子。
6. 第五十二回、金峴山金峴洞の兕大王、実は太上老君の青牛。
7. 第六十一回、羅刹女、後に正果を得る。

8. 第六十六回、小西天、小雷音寺の黄眉大王、実は弥勒菩薩の黄眉童子。
9. 第七十一回、麒麟山解豸洞の賽太歳、実は観世音の金毛。
10. 第七十七回、獅駝国獅駝洞の老魔王、実は文殊菩薩の青獅子、二魔王、実は普賢菩薩の白象、三魔王、実は大鵬。
11. 第七十九回、比丘国の妖道士、実は南極寿星の白鹿。
12. 第九十回、竹節山、九曲盤桓洞の九靈元聖、実は太乙救苦天尊の九頭獅子。
13. 天竺国の仮公主、実は月宮の玉兔。

六

これまで、私は先行する諸論文で、『西遊記』に内在する神話的モチーフを解明してきた。しかしそれらのモチーフがどの段階で入りこんだかという問題については特に言及はしなかった。現在知られている原西遊記、「大唐三蔵取経詩話」とか「西遊記雜劇」との関係はまったく問題にしなかった。それらの諸モチーフは、小説西遊記の成立の過程で入りこんだもので、原西遊記にはもともと無かったと考えているからである。

しかし「死と再生」は原西遊記から引き継いだ、いわば「深い」テーマであると考えられる。原西遊記の、現在見ることのできるもっとも整ったテキストである「取経詩話」には、すでに「死と再生」が基本的なテーマとして明確に出現する。

すでによく知られているように、「取経詩話」においても三蔵は前世で二回まで取経の旅に出て、そのつど沙悟浄の前身と考えられる深沙神に食われる。まず猴行者の案内で梵天宮に行き、そこで羅漢から、そのことを告げられ、ついで流沙河らしい場所で深沙神自身そのことを語り、遺骨をまだ持っていると言袋の中の骨を見せ、金の橋に化身して、一行を通過させる。

いま一つ、『西遊記』では脱落しているが、痴那のエピソードも重要である。王長者の後妻が先妻の児の痴那を水中に投げ込んで殺す。翌日法師一行がやってくる。法師が百斤の大魚を所望するので取り寄せると、魚の腹中から痴那が出現する。全篇の終わり近くに置かれている。三蔵一行は『西遊記』とは違って、尋常に陸路を帰国しており、長安に入る直前、河中府でのできごととなっており、最後は寺院で用いる木魚の由来談になる。痴那は長江に流される玄奘の前身であろう。通天河で魚怪に捕らえられて石匣に入れられることをも思わせる。大魚の腹中に入るところは、孫悟空が怪物の腹中に入ることとも関連しよう。

戦術として相手の腹中に入るとするのは孫悟空の前身とされる猴行者も、使うことができた。白虎精に出会った時に、腹中からサルを連続的に吐き出させて、最後にはみずから大石に化してその腹中に入り、倒してしまう。

物語が唐土帰還で終わらずに、唐土に経典をもたらしたのちに昇天することで終わるのも「取経詩話」ですでにそうになっている。

三蔵一行は天竺国に到着するが、仏は鷄足山に居り、山は千里の大河に隔てられていて、流れは激烈でありとうていそこへは行けないというので、行者の教えで祈りにより経典を感得、すべてで五千四十八巻あったが、般若心経が欠けていた。帰路盤律国までもどってきたところで、仏が出現、心経を授け、かつ今は四月だから、七月十五日までに長安に到着して仏法を興隆させ、昇天せよと命ずる。一行は六月末に長安に着く。七月十五日の午の五刻に天宮から蓮の舟に定光仏が乗って迎えに降りてきて、一行七人は乗り込んで天に昇っていく。

「取経詩話」の現存の本は巻頭の部分が失われていて、三蔵が旅に出るまでの経過が不明であるが、がんらい天上から取経のために派遣されたのではなかったかと思われる。とすると、やはりこの旅全体が一つの大がかりな「死と再生」の過程であったのである。

七

『西遊記』は、これまで見てきたように、「死と再生」を根本的な主題としており、玄奘三蔵と龍馬を含む四人の従者が、西天から経典を唐土にもたらし、衆生を済度し、自らの正果を獲得するために「死と再生」を繰り返す。その過程に参加するのは一行だけでなく、凡人や妖怪さえ含まれる。前稿で、『西遊記』は天地創造にまでさかのぼる壮大な宇宙的ドラマであることを解明したが⁽³⁶⁾、そうであるがゆえに、その物語は宇宙の基本的な法則である「死と再生」を物語の基本に据える必要があった。この構想はすでに「取経詩話」において存在したが「大鬧天宮」の一段を設定することによって、「取経詩話」の持ちえなかったスケールを獲得した。

「大鬧天宮」の事変はいちおう孫悟空の禁獄で解決され、「安天大会」が開かれたが、宇宙の動乱が完全に治まったのではない。孫悟空を焼き殺そうとした八卦炉は彼によって地上へ蹴落とされて火焰山となり、その山をめぐる牛魔王一族との壮絶な争闘が起こった。多くの神々や神仏の家畜が天上から逃げ出して妖怪となったのも、書中にそれと言及はないが、「大鬧天宮」の影響のもと宇宙の秩序が乱れたからではあるまいか。三蔵取経

の旅というのは、実は宇宙秩序の混乱を解決するためであり、一行のメンバーはもちろん、人間や妖怪まで、繰り返し供犠されては再生することが必要であった。旅がこのような性格であったから、唐土帰還では終わらずに、事業が完遂されたことを確認するために西天に再びもどり、一行五人が仏となるまで物語れたのである。

もっとも、最初から旅がそこまでのスケールをもっていただけではあるまい。「取経詩話」はもとよりまとまった西遊記物語としては現存最古であるが、それ以前にすでに相当に長く、三蔵取経説話が寺院の俗講や市井の講釈として流通していたことは疑いない。おそらくもっとも古い時期には俗講として親しまれていたものが、宋代の市民社会の成長にともない講釈に取り入れられたものであろう。この段階のテキストとしてまとめられたのが「取経詩話」と思われる。

現実の玄奘は仏教の僧侶で仏典を求めてインドに旅した。その物語は寺院の俗講の中で成長した。物語が強い仏教的色彩を帯びたのは当然である。私は「死と再生」が物語の骨格となったのは仏教の影響であると思う。三蔵が取経に成功するまで、前世で「取経詩話」では二回、『西遊記』では九回もの失敗を重ねたということから、ただちに想起されるのは、仏本生譚（ジャータカ）である。釈迦は成道して仏陀となるまでに、過去世においてほとんど無限に近い転生を繰り返し、修行を重ねた。その果報によって真理を悟り、仏教を開いたと信じられた。その過去世の修行についての物語が本生譚であって、独立した仏典にもなり、また仏経にも多く取り入れられて広まっている。全人類を真理に導いて救済するという偉大な聖業のためには、それだけの修行が必要とされたのである。唐代の俗講でもしばしば語られていたようである。しかもその中には有名な「捨身飼虎」の話のようにそれ自体が「死と再生」の物語であるものも含まれていた。⁽³⁷⁾このような仏教文学の伝統を踏まえて、三蔵取経の物語が「死と再生」の文学として成長していったことに何の不思議もない。

三蔵取経の物語は、本生譚の影響のもとに「死と再生」のモチーフを根幹として成長していった。おそらく宋元のころに、ユーラシア大陸の各地で流通していた神話的モチーフを大量に吸収して、一大神話的ロマンとなっていった。それらを統一するために「死と再生」のモチーフはきわめて有効であった。『西遊記』が大がかりな「死と再生」の物語となったのはそのためである。

註

- (1) 唐代の小説については、小南一郎氏（「李娃傳の構造」）がくわしく、明代の短編小説については、井波律子氏『中国のグロテスク・リアリズム』「生き別れの話」に興味深い分析がある。
- (2) 神田喜一郎博士追悼中国学論集 二玄社 1986
- (3) 『死と再生』P. 89
- (4) 『西遊記の秘密』P. 23 石は五行山の石窟を意味する。
- (5) 『西遊記人物研究』第一章第二節
- (6) 『西遊記』第一回、以下西遊記からのについては書名を省略する。使用底本は北京作家出版社1954年刊の鉛印本である。
- (7) 同上
- (8) 古代エジプトでは、死者の楽園は西方オシリス神の国土にあるとされた。（『エジプトの神話』）古代中国では西方崑崙山を經由して天に昇るとされた（『崑崙山への昇仙』）。仏教の西方浄土思想はいうまでもない。
- (9) 第三回
- (10) 同上
- (11) 第八回
- (12) 「大唐三蔵取経詩話」雑劇「西遊記」など。
- (13) 第四回
- (14) 第五回
- (15) 第七回
- (16) 同上
- (17) 第九回
- (18) 旧約「出エジプト記」
- (19) 『齊東野語』巻20「呉季謙改秩」
- (20) 『説岳全伝』第一回
- (21) 「桃太郎の母」全集巻6. P. 157
- (22) 三蔵の前世は第十二回、二十二回、八十一回等で語られる。
- (23) 第九十八回
- (24) 『中国の祭祀と文学』P. 253、P. 256

- (25) 『金枝篇』第38章～第42章（文庫第3冊）
- (26) 「三機能説より見た『西遊記』」 入谷 平野顕照教授退休記念中国文学論叢
大谷大学文芸学会
- (27) 『神話と夢想と秘儀』P. 277「怪物によって呑み込まれること」
- (28) 上記「三機能説より見た『西遊記』」
- (29) 同上
- (30) 「『西遊記』と『マハーバーラタ』」 入谷 古田教授退官記念中国語学文学論集
1985
- (31) 第十・十一・十二回
- (32) 第十一・十二回
- (33) 第十三回
- (34) 第十八・十九回
- (35) 「孫悟空とギリシャの神々」 入谷 日中文化研究2 1991
- (36) 「比較神話学的に見た『西遊記』」 入谷 神田喜一郎博士追悼中国学論集 1986
- (37) 「太子成道経」「八相変文」など

参 考 書

- 『金枝篇』 フレイザー（永橋卓介訳） 岩波文庫（全5冊） 1956～57
- 『神話と夢想と秘儀』 エリアーデ（岡三郎訳） 国文社 1972
- 『桃太郎の母』 石田英一郎 全集巻6 筑摩書房 1971
- 『死と再生』 井本英一 人文書院 1982
- 『エジプトの神話』 矢島文夫 筑摩書房 1983
- 『崑崙山への昇仙』 曾布川寛 中公新書 1981
- 『中国の祭祀と文学』 中鉢雅量 創文社 1989
- 「李娃傳の構造」 小南一郎 東方学報第六十二冊 1990
- 『中国のグロテスク・リアリズム』 井波律子 平凡社 1992
- 『敦煌変文』 上下 世界書局（台北） 1964
- 『西遊記人物研究』 張静二 学生書局（台北） 1984
- 『西遊記の研究』 太田辰夫 研文出版 1984
- 『孫悟空の誕生』 中野美代子 玉川大学出版部 1980

『西遊記の秘密』 中野美代子 福武書店 1984

『西遊記形成史の研究』 磯部彰 創文社 1993